

聖書:ルカの福音書14章7～11節

説教:自分を低くする者

はじめに

いつものように前回のあらすじから振り返ります。ある安息日に、イエスがパリサイ派の指導者に招かれて家に入ると、そこには水腫を患っている人が座っていました。パリサイ派の教えでは、いのちに関わらない病気であれば、安息日に治療してはいけないと言われていました。もしイエスがこの水腫の人を癒やせば、イエスは律法に違反した者として、皆の前つるし上げる。そんな罠が仕掛けられています。もちろんイエスは、そんなことは百も承知で、イエスは逆に質問します。「あなたがたは、自分の息子が井戸に落ちたらどうするのか。きょうは安息日だからといって、何もしないという人があなたがたの中にいるだろうか。」そう言うことから、水腫の人をいやして家に帰されました。このことについては、今日の箇所にも関係しており、そのことはまた後で見ることになります。いずれにしてもパリサイ派の人々は、イエスの挑発するような態度を見て大いに腹を立てたでしょう。ところがイエスはそんなことはおまかないなしで、話を続けていく。今日の箇所は、大きく二つに分けることができます。前半は招かれた客はどこに座るべきか、後半は食事にはどのような客を招くべきか。そんな内容です。いったいどんなことを教えてくださったのか、ともに考えてまいります。

1 客として招かれた人たちへ

1) 末席に座りなさい

まず前半ですが、要点は10節にあります。「招かれたなら、末席に行って座りなさい。そうすると、あなたを招いた人が来て、『友よ、もっと上席にお進みください』と言うでしょう。そのとき、ともに座っている皆の前で、あなたは誉れを得ることになります。」

これは実際の話なのですが、私の姉の息子（私の甥）の結婚披露宴のとき、親戚の一人が席順のことで怒り出し、姉は身が細くくらい苦労したと言っていました。怒る理由は説明するまでもありません。自分の席が期待していた場所よりも末席のほうに並べられていたからでしょう。おそらくこんな話しは珍しくなくて、一つ間違うと大変な問題が起きまかねませんから。ですから、ふだんの食事の席でも、まず席の譲り合いから始まるのが日本文化のお決まりのパターンです。ところが

イエスの時代はかなり日本の習慣と違っていて、招かれた客は上座から座っていくものだったようです。私たちは、イエスからわざわざ注意されなくてもすでにやっています。だから何も考える必要はないのか。

2) イエスはどこに座ったのか

そうではない。イエスが座る席のことでわざわざ注意をしたのには、なにか深いわけがあるはずです。ヒントは11節。「なぜなら、だれでも自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされるからです。」

どこかで一度は聞いたことのあるくらい有名なフレーズです。このようなことを言うくらいですから、イエスは当然自分を低くして末席に座っていたはず。それは何を意味していたのか。後半の部分を見てから考えていきます。

2 自分を招いてくれた人へ

1) 親族、近所の金持ちではなく

続いて後半の内容を見ていきます。12節から14節まで。「イエスはまた、ご自分を招いてくれた人にも、こう話された。「昼食や晩餐をふるまうのなら、友人、兄弟、親族、近所の金持ちなどを呼んではいけません。彼らがあなたを招いて、お返しをすることがないようにするためです。食事のふるまいをするときには、貧しい人たち、からだの不自由な人たち、足の不自由な人たち、目の見えない人たちを招きなさい。その人たちはお返しができないので、あなたは幸いです。あなたは、義人の復活のときに、お返しを受けるのです。」

食事の席に招待する人について、どうしてイエスはこんなに細かく言うのか、ちょっと不思議に思うかもしれません。実はこれには理由があつて、当時、律法学者、パリサイ派の人々が、食事の席に障がいのある人たちを招いてはいけないと教えていたことが背景にあります。ということはイエスは、当時の常識となっていた食事の習慣についてまったく反対のことを教えたことになります。

2) 水腫の人

いや、ただ口で語っただけではありません。イエスは実際の行動で示します。食事の席に水腫の人がいたことを思いだしてください。水腫という障が

いを持っていたのに、客として招かれていた。パリサイ派はそのような人を招いてはいけないと教えていたはずなのに、どうして食事に招いたのか。最初に言ったとおりに、安息日にこの人を癒やすのかどうか。そのことを試すために。

ところがそれだけではない。実はもう一つのことでイエスを試そうとしていたことが見えてくる。パリサイ派から言わせれば、招いてはいけない人が食事の席にいます。イエスはこれを見てどういう態度をとるか。もしもイエスが「この人を追い出さなさい」と言ったなら、試験に合格。何も言わなければ、それだけでイエスを非難する理由ができる。

結果はご覧のとおりで、追い出せとも言わなければ黙ってもいない。むしろイエス自ら進み出て水腫の人を抱いていやしました。

3) 貧しい人たち、障がいのある人たちを

それはよいのですが、ここでちょっと困ったことが出てくる。私たちは、ごくふつうに友人、兄弟、親族と一緒に食事をしています。お金持ちかどうかは別としても親しい近所の方と食事をすることもあります。ところがそのような人たちを食事に呼んではいけないと言われる。これは困ります。貧しい人たちを招きなさいと言われても、ほとんどの方は、とても自分にはできないと思うはずです。どうしてイエスは、こんな難しいことを言うのだろう

4) イエスはどのような客となったのか

こんなときは、視点を変えてみるとよい。「あなたはこうしなさい」と言われるので、自分のことばかり考えてしまいますが、ではイエスはどうだったのか。イエスはパリサイ派の指導者の家にどのような客として招かれていたのか。そう考えてみましょう。兄弟、親戚でもないし、近所の金持ちとして招かれたはずはありません。では友人として招かれたのか。いいえ、むしろその反対で、イエスを畏にかけるために招いたくらいです。パリサイ派の人々の目には、末席に座るのも汚らしいほどの貧しい者にしか見えていません。それだけではない。水腫の人を抱いて癒やされたことで、からだに障がいを持つ者と同じ立場に立たれました。

これでおわかりでしょう。この方はご自分の語ったとおりのことを、行いで示してくださいました。

3 十字架

1) この世の価値観とイエス

イエスの教えは、この世の常識とは正反対です。例えば就職活動をしている学生を考えてみます。就活生は何は、入社試験を受けようとしたらその前にエントリーシートを書かなければなりません。そこには、自分はどんなことができるか、どんな経験をしてきたか、どの点が優れているか、自分を売り込む言葉を一生懸命書きます。身を低くしなさいということで、「私は何も誇るものはありません」と書いたら、この学生は熱意がないと見られて一次選考で落とされるでしょう。

なかには入社試験を受けずに、有力者の紹介で就職する学生もいます。そのすべてを否定することではないかもしれませんが、実力で入ろうとする学生から見れば不公平と言われても仕方がない。イエスの言い方に倣えば、コネがあるということは、富んでいる者と食事をしてきたからです。社会的に力を持っている人と仲良くしていれば、いつか自分にとって役に立つ。反対に、貧しい者と食事をして何の得にもならない。そういうことになります。私などは社会的に何の力もありませんから、「小澤さん、ちょっと助けてもらえませんか」とか言われたことがない。だれも寄ってきません。

そんなこの世の人々の目から見ると、イエスのしていることは、最初から負けが決まっていた、実際に負けてしまったのではないかと言うでしょう。この後どうなったか。パリサイ派の人々の手によって十字架に追いやられ、殺されてしまったのではないか。人々の前で、立派なことを語ったかも知れないけれど、結局は負けは負け。そんな男の語ることを聞いてどうするんですか。そんなふうに言われて笑われるだけ。

あるいはこういうことなのでしょう。身を低くして末席に座っていたら、「友よ、もっと上席にお進みください」と言う者が必ず出て来て、そのときあなたは誉れを得る。もしそうだとし、貧しいことや苦しいことには変わりがないのではないか。

ではこういうことでしょうか。14節で、「あなたは義人の復活のときに、お返しを受ける」とある。「復活」ということは、その前に死ぬということです。死んだ後でお返しを受けると言われても、それでは遅すぎます。お墓の前で人々が手を合わせながら、〇〇さんは素晴らしい人だったよねと言ってくれたとしても、小説や映画ならば、感動的なシーンとなるかも知れないけれど、自分の人生が取り戻せるわけではありません。結局、手遅

れ、遅すぎ、取り返しがつかない。それで終わりです。

2) 義人の復活の日

イエスが十字架で殺されて死んで終わりであったなら、確かにそのとおりです。何の希望もありません。では、私たちは意味のない無駄なことを信じているのでしょうか。絶対にそんなことはありません。なぜなら、イエスは、復活、死からのよみがえり、それが必ずあることとして語っている。たとえ今、身を低くして人々から馬鹿にされ、愚か者とののしられても気落ちする必要はない。復活のときに高くされるから。いま貧しい者、からだの不自由な者であっても絶望することはない。復活のときに貧しい者は豊かにされ、からだは完全にされていく。これは嘘でも空想でもない。いのちを捨ててくださったイエスが、死からよみがえられました。11節で語られた、「自分を低くする者は高くされる」が、たんなるお題目ではなく、実際にそのとおりであることを、主はご自分のからだを通してお示しになりました。

3) 「あなた」のために

最後に考えます。イエスは、いったい誰のために十字架におつきになったのでしょうか。今日の箇所は何度も繰り返されていることばにお気づきでしょうか。「あなた」ということばです。あなたは宴会の席で恥をかかないように、末席に座りなさい。あなたは、義人の復活のときにお返しを受けます。「あなた」と語りかけて、どこまでも私たちのことを心配してください。

末席に座る。恥ずかしくていやだと言うのでしょうか。貧しい者を招待する。できないと言うのでしょうか。安心してください。努力しなくても私たちはそのような者となります。どうやって？自分を振り返りなさい。どんなに汚れて罪深い者であるかわかればわかるほど、神の前には出られないと思います。そう思ったらその人は末席に座っているのです。自分の罪が見えたなら、神の前ではあなた自身が貧しい者だったのです。他の誰かを招くではありません。私たちのほうが神の食卓に招かれています。私たちは、そこへ座る資格がある。その食卓に私たちを招くために、イエスご自身が低くなられ十字架に向かわれました。

そのことを覚え、御名をあがめます。